CASE 2　自分自身に向き合う環境を整える

# 多様な他者と協働する価値を、自分の内面を開示しながら生徒に伝える

東京都・私立かえつ有明中・高校　大木理恵子

## 生徒に自分の内面を開示し、「ありのままでよい」と伝える

「私は、自分の内面を表に出すのは苦手です。でも、今日は、夏休みに気づいた本当の自分について、勇気を出して皆さんにお話しします」

2学期最初のプロジェクト科（学校設定科目）の授業で、2年生を前に大木理恵子先生は語り始めた。プロジェクト科では、興味・関心の近い生徒同士がグループになって、取り組んでみたいことを自由に課題として設定し、協働的に探究学習を進めていく。課題設定では、自分の興味・関心に向き合い、さらにグループのメンバーの興味・関心にも向き合うことになる。だが、そもそも自分の「本当の興味・関心」を見つけることは簡単なことではない。興味・関心があると思っていても、それは思い込みであるかもしれないし、何か理由があって本当の興味・関心から目を背けていることもあるかもしれないからだ。そして、異なる価値観を持つメンバーがお互いを尊重し合い、協働を続けていく必要もある。

そこでプロジェクト科では、自分や他者がどのような存在なのかをじっくりと生徒が考えるワークショップを実施している。この日は、生徒が対話を通して、各々が大切にしているものに気づき、グループとして探究学習を進めていく上での土台を築くことをねらいに活動した。

「夏休み前に、皆さんには、未来をつくるために、今の自分のままで居心地よく過ごせる『コンフォートゾーン』から一歩を踏み出そうと話をしました。そのあと実は、『コンフォートゾーンからの越境は、生徒だけではなく、教師にも必要だから、夏休みに自分たちもそれぞれ一歩を踏み出す体験をしよう』と、先生同士でも話をしたんです。だから今日

**東京都・私立かえつ有明中・高校**

◎嘉悦孝が日本初の女子商業学校「私立女子商業学校」として創立。獲得すべき知識・技能を明示したアクティブ・ラーニングの導入や、答えが1つではない課題解決型授業「プロジェクト科」におけるルーブリックの設定、体系づけられたグローバル教育など、先進的な教育を展開する。
◎設立　1903（明治36）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約180人（高校1年生）
◎2019年度入試合格実績（現浪計）国公立大は、千葉大、東京工業大、東京大、横浜国立大などに14人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、中央大、東京理科大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ343人が合格。
◎URL　https://www.ariake.kaetsu.ac.jp/

**かえつ有明中・高校の探究学習**

### 常識から自由になって真に探究したいテーマを探す

学校設定科目のプロジェクト科では、これからの社会で求められる資質・能力を育むため、講義形式の授業ではなく、生徒たちが能動的に学習に参加するアクティブ・ラーニングを数多く実践している。「学び方を学ぶ」「自分軸を確立する」「共に生きる」の3つの軸を高1段階からじっくりと育み、思考を縛る常識や社会通念を剥ぎ取る。その上で自分の興味・関心に応じて、多様な人たちと主体的に対話を重ねながら、グループで取り組む探究テーマを模索していく。大木先生は、2年生のプロジェクト科を担当。

■プロジェクト科の学びの3つの観点

| 3つの観点 | 学び方を学ぶ | 自分軸を確立する | 共に生きる |
|---|---|---|---|
| 意図 | 「学び」のパターンや対話的・創造的アプローチを習得する | 自分の大切にしている思いに気づくことで、他者のつくった評価軸に縛られなくなる | だれにとっても安心安全な場を創る中で、存在そのものがリスペクトの対象だと気づく |
| 指導の具体例 | パターン・ランゲージ（＊）やシステム思考などのワークショップを通じて、他者の「多様な学び方」を学び、創造的学び手となる | ペアインタビューや表現活動を通じて、自分自身でも整理できていない自分の思いや価値観と向き合う | 互いの感情に意識を向けたコミュニケーションのトレーニングなどを行い、自分の感情や思いを大事にしつつ、相手に寄り添っていく |

＊成功している事例の中に繰り返し見られる暗黙知を言語化し、他者と共有していく営み。

東京都・私立かえつ有明中・高校 **大木理恵子** おおき・りえこ
国語科。高校2年生のプロジェクト科の授業を担当。

自分の過去の体験を語り、「自分らしく、みんなと探究に取り組みたい」と生徒に語りかける大木先生。生徒たちは、大木先生の心からの言葉をどのように受け止めたのかを語り合いながら、さらにお互いを理解していった。

は、これから、私が夏休みに自分について考え、気がついたことを皆さんに話したいと思います」

大木先生が生徒に語ったのは、幼い頃のある体験から、「自分はくだらない人間だ」「周りから認められる存在にならなければいけない」といった思いに縛られてきた自分に気づいた……という内容だった。苦しんでいる自分に気づかないふりをしていたし、くだらない自分を安心させるために、無意識にほかの人のことを見下すこともあった……およそ10分間にわたって自身の内面について語った後、大木先生は自分をじっと見つめる生徒たちにこう語った。

「弱さを含め、ありのままでいいんだと自分を受け止めて初めて、他者の存在を受け止められるのだと思います。私も、みんなと一緒に、本当の意味で自分を解放し、自分らしくみんなの探究学習にかかわっていきたいと思っています。勇気を出してみんなに話してよかったです」

## 「ただ聴く」ことで、グループ内の関係性を強める

今度は、生徒たちが自分の内面を見つめる番だ。大木先生は、「今後、協働的に探究学習を進めていくために、仲間の助けを借りながら自分を理解し、お互いを受け止め合う感覚をみんなに味わってもらいたい」と生徒に語りかけ、「1人ずつ順番に、自分の今の心境を語ってください。そして、それを聴く人は、評価や判断をせずに、ただ集中して聴いてください」と説明した。

プロジェクト科では、グループ内の関係性を強めるために、「聴く」という行為を重視している。プロジェクト科の授業づくりにおいて中心的な役割を担い、この日の授業に

も大木先生のサポート役として参加した佐野和之先生が、「聴く」という行為がグループでなぜ大切になるのかを補足的に説明した。

「自分が『聴く』ことで、話している人がありありと幸せになっていくような貢献的な『聴き方』をしてください」

生徒たちはグループ内で順番に、大木先生の話を聴いて感じたことや、自分の夏季休業中の越境体験をプロジェクト科でどのように生かしていきたいかなど、今の自分の気持ちを語った。それを聴いた生徒は、自分が感じたことを伝え、さらにそれを受けて、先に話した生徒が、「どんなふうに話を聴いてもらえたと感じたか」を語った。語り、聴くという行為を丁寧に積み重ねることで、人間関係が深まっていく。

生徒の対話はさらに続いた。大木先生は生徒に、夏季休業中の残念だった経験、悲しかった経験をグループのメンバーに話してほしいと呼びかけた。

「ネガティブな感情で心が揺れ動いた経験を、無理せずに言えるもので構わないので、グループのメンバーを信じて話してもらえますか。メンバーに聴いてもらい、感じたことをフィードバックしてもらうと、自分が大切にしている価値観に気づかせてもらえるかもしれません」

グループのメンバーが語る夏季休業中の経験を聴きながら、そこにはどんな感情があったのか、そのような感情を持つメンバーはどのような価値を大切にしている存在なのかをお互いに考えていった。対話を通して、自分が、メンバーがどのような存在なのかを探究していく。「今は自分に自信がないけど、こうやって悩む自分を尊敬できる時が来ればいいなあ」と思いを語る生徒の声が聞こえてきた。

「皆さんの中には、メンバーの助けを借りたことで、自分が心の奥底で大切にしているものに気づいた人もいるはずです。自分が大切にしている感情や価値を意識して、これからのプロジェクトに取り組んでほしいと思います」（大木先生）

◎グループのメンバーの経験を聴き、その時話し手にはどのような気持ちがあったのか、話し手はどのような価値を大切にしている人なのかを考える。感情や価値につながるキーワードが書かれたシートやカードを使いながら、対話を進めていった。

## 教授者ではなく伴走する人として生徒とともに越境する

大木先生がプロジェクト科を担当して2年目。昨年度は、佐野先生とのTT（チームティーチング）が多かったが、今年度は大木先生が1人で授業を行うケースが増えた。

「プロジェクト科の授業での生徒の悩みや不安は、大抵『本当にこのテーマでよいのだろうか』『そもそも自分が何をやりたいのかが分からない』といった課題設定に関するものです。そうした悩みや不安を持った生徒に対して私は、生徒が自分自身で考えを整理できるように、『なぜ、そう思うようになったんだろうね』『あなたが大切にしている気持ちはそれなのかな』と、生徒の思いが湧き出ることを願いながら話を聴くようにしています」

教師として十分なキャリアを持つ大木先生だが、プロジェクト科を担当するようになって、「生徒が今、どんな状態にあるのかを敏感に察知できるようになりたい」と考えるようになったという。

「プロジェクト科を通して、教師の言葉や働きかけによって、生徒の変化の度合いは大きく変わるのだと改めて実感しています。ただ、まだ私は、生徒が本当の思いを語るのを待てずに、生徒を急かしてしまうことがあります。そうした時、探究学習は浅いところで止まりがちです。佐野先生からは、『それは生徒の問題ではなく、大木先生の問題ではありませんか?』と指摘されてハッとすることがあります」

プロジェクト科で生徒が設定する課題は多種多様だ。それが学術的ではなくても、生徒にとって本当に探究したいこと、大切なことであれば、価値のある探究学習が実現すると大木先生は考えている。

「以前、『ブレークダンスを友人に教える』という課題を設定したグループがありました。正直、その課題を聴いた時、単なる遊びではないかと思いました。しかし、発表会では、ダンスを披露した上で、グループの中でどんな貢献をし合い、人間的にどのように成長してきたのかを見事に言語化していて、私は『これがプロジェクト科なのか!』と感動しました。その時、探究学習での教師の役割は、生徒がのめり込める環境をつくることだと確信しました」

教師が「導く」というスタンスのままでは、生徒による真の探究学習は生まれないと大木先生は語る。

「教授者ではなく、伴走する人として生徒と語り合い、生徒の状態を察知して学びの場を整えることが、これからの教師に求められる役割だと思います。その点では、私にとって佐野先生は、新たな目標です。これまで、『生徒の存在そのものをリスペクトする』という佐野先生のあり方から、様々なことを学びました。『教師が信頼すれば、生徒は想定を超えて成長する』という信念を持って、これからも教師として、1人の人間として自分も成長していきたいと思います」

同校では、生徒も教師も、「ありのまま」を互いに受け入れた上で、越境を試みようとしているのだ。

## 相手の内面を深く理解できるようになりました

福永理紗さん（2年生）

今日、大木先生は私たちに、自分の内側にあった、自分でもそっと横に置いていた弱い部分を話してくださいました。私たちを信頼して話してくださったのだと思いますし、「私たちは、大木先生のいいところも知っているよ!」と言いたい気持ちになりました。大木先生のことに限らず、以前は、ほかの人を非難する発言を聞くと、「そうなのか」と安易に受け入れていましたが、今は「それは短所ではなく、長所でもあるよね」と、受け止められるようになりました。プロジェクト科で、お互いの話を聴き、相手を深く理解するような時間を積み重ねてきたからかもしれません。

私のグループは、探究する課題がまだ全く具体化していません。でも、メンバーと話す中で、「みんな、身近なものにアプローチすることが向いている気がする」という点には、共通の理解があります。正直どんな課題が設定されるのかは想像がつきませんし、プロジェクトとして完成しないかもしれませんが、今は見えていないゴールや、自分たちなりの答えにたどり着ける可能性もあります。だからこそ、これからが楽しみです。

大木先生のメンター・佐野先生が12ページに登場します

## 「自分が変わろう」という覚悟が、生徒を強く引きつける

東京都・私立かえつ有明中・高校
佐野和之先生

大木先生は、豊かな経験をお持ちで、国語の授業でも、アクティブ・ラーニングをいち早く実践していました。探究学習については、まだ「自分にできるだろうか」「これでよいのだろうか」という不安もあるようですが、それでも「自分が変わらないと生徒は成長しない」と、試行錯誤されています。だからこそ、生徒は誰よりも大木先生のことを信頼していると感じます。